

副会長からのメッセージ

際立つレベルの「品質管理」を目指して



積水化学工業(株) 相談役
大久保尚武

最近、たいそう嬉しかったニュースという、やはり小保方晴子さん(理化学研究所)らによるSTAP細胞の作製成功のニュースです。ノーベル賞をもらった山中伸弥教授のiPS細胞につづいて、同じような分野で日本人が続けて画期的な成果をあげたことに、「凄いなー」と嬉しさがこみあげてきます。

これはまさに虚を突かれるような、びっくり仰天の研究であり成果ですが、わたしが一番驚き興味をもったのは、「弱酸性という、どこにでもある環境・刺激を与えることで成熟細胞の初期化ができる」という、ある意味常識の枠をはずれた仮説をどうして立てることができたのかということです。そんな凄い仮説・目標を立てて挑戦し続けたことに、わたしは一番興味をおぼえます。

この小保方さんのはなしは基礎研究の世界のことですが、われわれのものづくりの世界でも、いまや仮説・目標の立て方が非常に重要な課題になっています。世界で戦うためには、「技術レベルが高い」「安い」「品質が安定している」といっただけでは、もはや勝てなくなってきました。もちろん、どれも非常に重要な要素なのではありますが、それにプラス・アルファがいるのです。

そのプラス・アルファとは、やはり消費者にとって驚きをよぶような「何か」なんだと思います。「これは凄い!」とか「本当はこれが欲しかったのだ!」とか、「技術的に、ここまでできるのか!」といった、消費者がアッと驚くような、これまでの常識を超えたレベルの着想を具体的な「もの」として作りあげなくてはならないのです。わたしはそれ

を「際立つレベル」といっています。かつてのソニーの「ウォークマン」とか、トヨタの「プリウス」などはその例ですが、それらが凄いのは、当時だれも思いつかなかったアイデアを開発目標として決めたことが第一、そしていろいろあったであろう障害をのりこえて、断固商品化までもっていったところなのです。

いまやそうした「際立つ商品」を開発目標にかかげている企業が多いとおもいますが、それを商品として世にだすためには、とうぜん「際立つ品質技術」が要求されます。品質管理に求められるものの「質」と「水準」が、そうとう違ってきている、そうわたしは感じています。

「際立つレベルの品質管理」われわれが目指すべきはそこだ、そう信じています。

本年度は、第3期中期計画の最終年にあたり、中期計画の「Qの確保」、「Qの展開」、「Qの創造」と「共通領域の推進」の4本柱を継承し、更なる充実発展を図ってまいります。また、次の新たな中期計画についても考えてまいります。産官学が連携し、日本が際立つレベルの品質管理を目指すように、学会長をはじめ学会員の皆様と共に取り組んでまいりたいと思います。宜しくお願いいたします。

* * *

校正段階で突然「小保方論文、取り下げか」のニュースが飛び込んできて、書き直すかどうか迷いましたが、この文章の言わんとする趣旨はキチッとご理解いただけたと思いますので、敢えてそのまま掲載させていただきます。ご了承ください。